Osaka University Knowledge Archive

Title	栗田隆子さんへの感想文④
Author(s)	小西, 真理子
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2022, 4, p. 25-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86357
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

特集１　第３回臨床哲学フォーラム（シリーズ：ふるいにかけられる声を聴く）
テーマ「書くことと、考えること、行動すること」

栗田隆子さんへの感想文④

小西　真理子

栗田さんとは、私が臨床哲学研究室に講師として着任したことによって出会いました。ちょうど私が着任した年に、研究室のコースアシスタントとして勤務してくださっていた栗田さんは、「迷宮にようこそ」と、これから私の身に降りかかるであろうことを想像した言葉とともに迎え入れて下さいました。そして、「今までどおりでいいんです」と声をかけて下さったことの深みとありがたさは、今振りかえると余計に染み入ります。その日から何度も、栗田さんは顔を合わせるたびに、気づかいの言葉や温かい表情を見せて下さっていました。いつもバタバタしていて、個人研究室にはほとんど不在の私に、会うたびに温かい表情を見せて下さった臨床哲学の先輩、栗田さん。とても感謝しています。

さて、栗田さんのイベントの前に、私たちは栗田さんが長年執筆されてきた膨大な書き物に触れました。今回のイベントを企画してくださった、桂ノ口結衣さんが、栗田さんのご著書『ぼそぼそ声のフェミニズム』に収録されている文章のみならず、『働く女性の全国センター』、『かもす通信』、『フリーターズフリー』や各種対談など、膨大な執筆物・対談集からなるアーカイブを作成してくださいました。このアーカイブはフォーラムの勉強会のために限定して使用されたものでしたが、アーカイブに栗田さんの軌跡が詰め込まれているように思われ、無機質なパソコン画面上に浮かび上がる資料がなんだか温かいのです。そのアーカイブのなかには、媒体によって語りかたを変化させながらも、一貫して、ご自身の生や経験を起点に置きながら他者や社会に語りかける栗田さんの姿がみられました。栗田さんご自身との距離がない、決して宙に浮くことのない言葉たちは、ある現実を生き、そこで現実問題として悩みを抱えている人びと――特に、自分が現にここで生きていて悩んでいるのに、あたかもないもののようにされてきた女性たち――にとって、自分が見つけてもらえたような気持ちを与えてくれるのではないかと思います。栗田さんが特に光を当ててこられた非正規労働者としての女性と、今の私の立場はかなり違っていて、その文脈で私について語ることは傲慢でしかありません。しかし、栗田さんご自身が、ないものにされてしまうようなものを敏感にとらえられる方であるということに光をあてるならば、特に研究室に着任した当初に諸々の気持ちを抱えていた私に栗田さんが向けて下さった言葉や表情と、栗田さんご自身の思想とは、どこか接点をもつように思われるのです。

そのことは栗田さんのご講演のなかでも感じ取られました。栗田さんはご自身がされようとしていることを、「男性に対抗することではなく、女性を知ることだ」と述べられまし

た。私自身も日常で感じていることを表現する術がないと思うことは多く、その表現を手助けしてくれる書き物の多くが、女性の手によって書かれたものである傾向にあります。そして、そこでもないものにされている人たちがいます。すでに用意されてきた言語や、一部の特権的な女性たちが使用している言語ではない仕方で、栗田さんがないものとされてきた人たちについて書く言葉は、その人たちを知ることからはじまっていて、だからそこで生きる人たちに響くのだと思います。

栗田さんは、「書くことと、考えること、行動すること」そのものではなく、その手前にあることについて語られました。その手前には、「言葉がないこと、呻き、祈り」があるのだと。「口も（話すための）壁」になるという言葉は、私の経験にしっくりきました。手前にあるものは、ともすればその手前のままにとどまり、人びとに気にとめてもらえないものかもしれません。しかし、栗田さんのまなざしは、その手前にあるものに向けられていました。このことは「ないものにされてきた」人たちに栗田さんの言葉が染み入ることと関係しているように思われます。栗田さんの言葉は、きっと「言葉がないこと、呻き、祈り」に向かっていて、「書くこと、（言語として）考えること、行動すること」までたどり着けない人の苦悩を支えるものなのではないでしょうか。いや、「たどり着けない」という表現もひとつの価値観が含まれているわけです。その手前にあるものこそが、ここでは大切なのだと思います。一方、栗田さんが、膨大な執筆物を書かれてきたことは、「言葉がないこと、呻き、祈り」を包み込んでいるように思えました。「書くこと」は組織というものを知らない栗田さんが個人でできる手立てでしかなかったのだと、栗田さんは述べられました。でも、その個人が栗田さんのように書くことに卓越しているとは限りません。栗田さんの現在のご関心は「個人であること」が脅かされない「組織」との関係について考えることだそうです。

栗田さんのご講演はシモーヌ・ヴェイユの哲学を中心に展開され、その雰囲気は栗田さんアーカイブのなかにある多くの書き物のイメージとは少し違うものでした。栗田さんご自身も、両者はつながっていると言われながらも、「いつもと違う内容の発表をする」とはっきりとおっしゃられていました。「哲学者栗田隆子さん」に出会えた気がして、なんだかちょっと特別な場所にいさせてもらっている気持ちにもなりました。しかし、驚いたことは、私が栗田さんのご発表からメモをとったことと、栗田さんの日常的なお姿や、アーカイブに収録されている書き物から受け取っていたイメージが、自然につながったということです。私が自分にとって響いた言葉を勝手に抜き出したからなのでしょうか。でも、グループワークで共有された、ほかの参加者の方々が持たれる感想も、それぞれの方がもたれているなんだかもやもやしているものが触発されたことと関係するようなものでした。このあたりの両者のギャップと自然なつながりの不思議への疑問をぼんやり抱えておこうと思います。

（こにし・まりこ）